投稿

「環境と文明」と地球環境問題と経団連、そしてイラン

小林　料

「環境と文明」は､34 年間読み続けています。何度か私の粗稿を掲載して頂きましたが、最近の加藤さんの「環境文明社会づくり」も、自分自身の記憶と重ねて、懐かしく読んでいます。

4 月号にも、木川田さん、平岩さんと並んで、小生の名前を書いて頂いて、恐縮に感じているところです。

二人の「財界の巨頭」とは、比べものにはなりませんが、木川田さんとは、会長と係長の関係でしたが、平岩さんとは、会長と課長から顧問と顧問（格は違います）までの長いお付き合いなので思い出もたくさんあります。平岩さんからは、あの大戦で，南海の孤島を敗残兵としてさまよった悲惨な記憶など、到底聞けないお話もうかがいました。

しかし、平岩さんの思い出といえば、平岩さんが、経団連会長に就任されるとき、それ以前から、経団連の環境問題担当として、経団連の「地球環境対策」をまとめるお手伝いを命じられ、経団連事務局とともに、原案の作成から、こき使われた記憶が鮮明です。

「地球環境憲章」という、やや大時代なネーミングも「これで行きましょう」という平岩会長自身の発想でした。

とにかく、中身の詳細にわたって、いちいち細かく指示があり、半年以上かけて作り上げた記憶があります。出来上がった「憲章」は、マスコミはじめ各界の高い評価を得て、東電、経団連の事務局一緒に祝杯をあげました。

加藤さん率いる環境省地球環境部からも、珍しくお褒めの言葉をいただきました。

役所と経済界、環境省と経団連といえば、対立とまでは言わないにしても、この時ほど「気が合った」ときはなかったのではないでしょうか。

1991 年「憲章」作成以来、四分の一世紀を経て、いろいろありました。その中で、COP3 をはじめ、環境省と経済界が一緒になって進めた温暖化対策をはじめとする「地球環境対策」も多かったと思います。

パリ協定をはじめ、「これで温暖化対策ひいては地球環境対策がすすむ」と感じた時期がありました。しかし、これを一方的に破壊しようとする一国の指導者が現れるとは、夢にも思っていませんでした。

ましてや、宣戦布告もしない「戦争」が 21 世紀に存在するとは全く想定外です。

思い出します。1945 年、日本が戦争に負けた後、東京裁判で、当時の日本の指導者たちが、絞首刑を宣告されたとき、日本人は平然とこれを受けとめました。しかし、その「戦争犯罪」の筆頭に「布告をしない戦争開始」（実際は数時間のおくれ）が、挙げられていたことを、私は忘れません。

数多くの戦争犯罪人に対する「death by hanging」という淡々とした宣告を平然と、しかし､複雑な思いで受け止めた日本人にとって、イラン戦争の始まりをどう理解すればよいのか。私は、あの世への宿題に持っていきましょう。

「環境と文明」を読み始めて 34 年、長いお付き合いになりましたが、加藤さんも、藤村さんもまだまだ若い。後続のメンバーもたくさんおられることでしょう。

「環境と文明」の持続と発展を願っています。
（98 才 6 か月の思い）